

左手の鳥

chrcc

逢坂さんの手は、左の方だけ鳥の形をしている。

二枚の翼と、嘴、くるくる動く真っ黒な瞳も備えた立派な青い色の鳥である。時折、翼を動かすが、尾は手首と同化しているので飛び立つことはない。飛びませんねえと、鳥の頭を撫でれば、逢坂さんがくすぐったいと笑う。餌を与えてみようと、ペットショップから粟を買い、嘴の前に差し出してみたこともあったが、一向に啄もうとはしない。

逢坂さんが言うには、鳥の形をしているが、それはしっかりと左手であるらしい。翼を動かすのも、嘴を開閉させるのも、瞳をくるくるさせるのも、全部逢坂さんの意志で行うのだという。

生まれつき左手が鳥の形をしているのかと疑問に思い、こっそりと逢坂さんのアルバムを開いた。ある時までは左手は通常の五本指のものであった。学生服を着て、何人かの少年たちとはしゃいでいる写真を境に、逢坂さんの左手は鳥の形になった。鳥の形の左手は生まれつきではなく、中学生の頃からのものであるようだ。

不便を感じることもないと、逢坂さんは言う。翼を自在に動かし、物を掴んだり、放ったりも出来るのだと、言う。それに、と逢坂さんは左手を見つめる。随分、慣れたよ。そう言って、僕の頬に左手で触れた。

僕も、付き合い始めの頃は、逢坂さんの左手に興味を持ち、疑問を抱きなどしていたが、ひと月も経てば、すっかり慣れてしまった。手を繋ぐために、逢坂さんの右側に移動することも当たり前のようになれるようになった。慣れないのは、セックスの時に、逢坂さんの左手が背中に這わされることだけである。翼が背中をなぞる度に反応すれば、逢坂さんが幸せそうな顔で微笑するから、一生慣れずにおこうと思っているのだが。

近所の公園の桜がすっかり散ってしまった頃である。

「何だか、おかしい」

逢坂さんが言うようになった。言う度に、何がおかしいんですか、と問うが、何だかおかしい、と言うばかりだった。

何だかおかしいと言われて、何が、と問う日がしばらく続いた。何が、が、大丈夫ですか、に変わり、もう暫く経って、ついに逢坂さんの「何だか、おかしい」は「左手が、何だか、おかしい」に変化した。

「形は元からおかしいんだけどさ」

「鳥ですしね」

「形じゃなくて、中身が、なんか、変」

「どこかにぶつけたとか」

「そういうんじゃないで」

「どういうんですか」

「さみしい、かんじがする」

さびしい、ではなくて、さみしい、のだと言って、逢坂さんは左手の翼をばさばさ動かした。

ばさばささせているうちに、羽が一枚抜け、床に落ちた。床に落ちた羽は、淡い青色をしていた。逢坂さんは右手でその羽を拾い上げ、左手に摘ませた。

「病院、行ってみますか」

言って、僕は逢坂さんの左手が摘む羽を取り上げて、吹いた。羽はひらりとルームランプのあたりまで舞い上がって、所在なさげにあちこち、ゆったりと移動しながら、再び床に落ちた。

羽の移動が終わるのを見届け、逢坂さんは僕の眼前に左手を突き出した。

「病院は、やっぱり動物病院？」

左手の鳥の嘴を開閉させて、鳥が喋っているようにして、逢坂さんが問うた。

左手は鳥の形をしているが、あくまで逢坂さんの身体の一部であるのだから、動物病院ではないだろう。しかし、人間が通う病院で診てもらったからと言って、逢坂さんの左手の不調が解消されるとも思えない。

考えあぐねているうちに、眠くなった。明日、考えましょう。そう言って、二人でベッドに潜り込んだ。

眠りに落ちる最後の瞬間、僕は初めて逢坂さんの左手と手を繋いだ。どんな風に逢坂さんの左手の鳥が僕の右手に絡まっているのか気になったが、眠ることにした。

次の日、逢坂さんの左手は、普通の、ごくごく一般的な左手の形になっていた。鳥の形では無くなっていた。

逢坂さんは、鳥の形では無くなってしまった左手を撫でながら、鳥が飛び立った様子を話した。

明け方、朝焼けが綺麗な予感がした。カーテンの隙間から、うっすら見えた空が濃い紫色だったから、予感は確信になった。カーテンを開け、窓を開けた途端、左手の鳥が飛び立った。まさかと思い、自身の左手を見れば、手首から先が無くなっていた。どうしようもないので、もう一度眠った。次に起きてみると、左手が生えていた。

とつとつと語る逢坂さんは、ひどく悲しい顔をしていた。間もなく泣き出すのではないかとも思える顔である。

粟を差し出しても、啄むことのなかった鳥は、果たして逢坂さんから飛び立って、生きていけるのだろうか。逢坂さんの左手になる前は、誰かの左手だったのかも知れない。それならば、また誰かの左手になっているだろうから、餌を食べずにも生きていける。もしかしたら、誰の左手にもなれず、餌が得られず、逢坂さんの左手に戻ってくるかも知れない。

「さみしいかんじて、このことだったんだ」

そう呟いたきり、逢坂さんは黙った。

逢坂さんの左手の鳥が、僕の左手の鳥になったのは、それからすぐだった。

ベランダに干した洗濯物を取り込んで部屋に戻ると、左手が鳥の形になっていたのだ。何の痛みも感触もなく、鳥は僕の左手になっていた。

青い色や、翼の形、瞳の黒、何処をとっても逢坂さんの左手であった鳥と同じだった。

僕の左手が鳥の形になっているのを見つけ、逢坂さんは瞬いだ。

左手の鳥の翼を動かしてみた。小指と中指を動かすようにすれば、自在に動いた。次は嘴を、動かす。こちらは感覚が上手くつかめない。

「この左手、どのくらいで慣れました？」

上手く動かない嘴を何とか動かそうと、人差し指を動かすようにしたり、手のひらに力を入れるようにしたりしながら、逢坂さんに尋ねた。

「だいたい、三ヶ月くらいかな」

そう言って、笑む。

鳥の嘴がようやく、上手く動いた。親指を反らすようにすれば、上手くいくらしい。

「居なくなったら、どれくらいさみしいですか」

いつか逢坂さんがやったように、嘴の開閉にあわせて声を出し、鳥がそうしているように問

うた。

「ずっと、かな」

逢坂さんは、僕の左手の鳥の頭に丁寧に口づけた。

僕も、逢坂さんを真似て、口づけた。

左手の鳥は、取り入れたばかりの洗濯物と同じ匂いがした。